

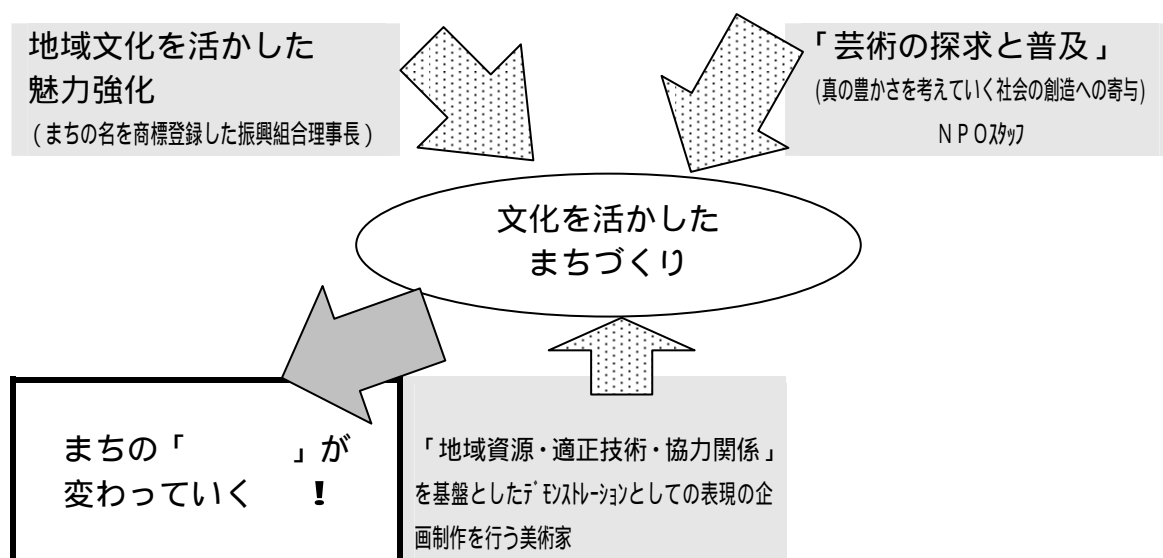
「まちの文化力とその活かし方」

～市民生活に根ざした地域の文化資源によるまちづくり～

平成16年7月22日(木)午後4時～5時30分 神戸文化ホール 中ホール

主催：神戸市 共催：文化庁・関西広域連携協議会・関西元気文化圏推進協議会

第2回市民フォーラム「まちの文化力とその活かし方」は、文化を活かした「新たなまちの魅力の掘り起こし、見直し、整理」を実践する活動の仕掛け人と、関西元気文化圏文化力アドバイザー-寺脇研文化庁文化部長をパネリストに向かえ、文化・芸術活動が人々の生活に新しい価値感を生み出し、まちの賑わいの創出と活性化につながることにについて、事例紹介とディスカッションにより、参加者とともに都市生活における文化芸術の持つ創造性の重要性を再確認します。



「関西元気文化圏」について

河合隼雄文化庁長官が平成15年3月17日、「経済だけでは日本は元気にならない。文化面での東京一極集中を是正する第一歩を、文化の蓄積がある関西から始めたい。」と文化の面から関西の活性化を図るため文化・芸術事業を関西で集中的に開催する「関西元気文化圏構想」を公表。

同年5月22日に関西の経済団体や神戸市長を含む地方公共団体の代表者50人による発起人会を開催。

また、関西元気文化圏の活動に対する参加促進や広報普及・関西における文化的魅力づくり等関西元気文化圏の推進に資する活動を行うことを目的として、関西元気文化圏推進協議会が同年8月6日に小泉首相、河合長官を迎え、関係者約80人が出席し設立。

「関西から文化力」(関西元気文化圏推進協議会の取り組み)

関西元気文化圏推進協議会を通じ、関西で実施する文化関係事業について広報を行い、一体感を醸成するため、共通のキャッチフレーズ「関西から文化力」や同ロゴマークを使用しています。



関西元気文化圏 文化力アドバイザー プロフィール

寺脇 研 / てらわき けん (文化庁文化部長)

1952年 福岡県生まれ

1975年文部省入省。広島県教育長，大臣官房政策課長，生涯学習担当大臣官房審議官などを経て，平成14年8月から現職。映画評論家としても活躍。NPO法人日本映画映像文化振興センター副理事長。『21世紀へ教育は変わる』『動き始めた教育改革』、『映画を追いかけて』など著書多数。

パネリスト プロフィール

曹 英生 / そう えいせい (南京町商店街振興組合 理事長)

1957年 神戸・南京町生まれ

南京町の豚まん専門店「老祥記」(大正4年創業)店主

元町東地域協議会(mew)の企画委員長，神戸市政策提言会議メンバー，「震災10年神戸からの発信」推進委員会委員などを務めている。

パネリストからのコメント

今こそ身近で本物に触られる神戸の町を見直そう

神戸港開港に伴い中国人がこの地に居と店を構えるようになってから，関西の台所としての繁栄，戦後の荒廃と衰退，当組合設立から町を復興して今に至る歴史の中で，中華街・南京町の構成要素の重要な一つは「食」でした。

明治時代から昭和初期までの神戸の町では，港で仕事をして，南京町で食事と買物をして，山手の家へ帰る，というのが定番だったそうです。

食い倒れと云えば大阪ですが，食に関してはハイカラ文化の神戸っ子の方がこだわりを持っているように思います。中華料理でもフランス料理でもインド料理でもお菓子でもお酒でも，身近で本物の味を楽しめる神戸の町では，間違いなく「量より質」だと思っからです。

今後南京町としては，観光客だけに目を向けるだけでなく，地元神戸の方々が本当に満足できる料理を極め，リピーターの多い店作りを目指すことが急務でしょう。

現在，南京町には春節祭と中秋節の二つの大きな祭があります。春節は旧正月を祝う祭，中秋節は旧暦の8月15日の十五夜に，中秋の名月を愛でて月を祀り，秋の豊作を祝って地の神様を祀るお月見の節句です。

南京町では，日中食文化の違いや中国料理の多様性を紹介するため，それぞれの祭の中に食のイベントを盛り込んでいます。神戸っ子の大好きな「おいしいもの」を通して，中国の奥深さや楽しさ，日中の良いところが共存共栄する南京町の魅力を，もっと多くの方に知っていただきたいと思っています。

パネリスト プロフィール

藤 浩志 / ふじ ひろし (藤浩志企画制作室代表, RSPS Lab. 主宰, 美術家)

1960年 鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、パプアニューギニア国立芸術大学講師、都市計画コンサルタント勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。

「地域資源、適正技術、協力関係」を基盤としたジャンルに捉われない活動の企画・制作を試みる。近年の活動としては、家庭から排出される素材をツールとして地域活動をつくるデモンストレーション「Vinyl Plastics Connection」「Kaekko」の全国各地での展開をはじめ、神戸の新開地での「楽座」プロジェクトの企画監修等がある。

パネリストからのコメント

地域(まち)とアートについての超訳

絵描きがキャンバスにイメージを描くように、地域社会というキャンバスに何か素晴らしいイメージを描けないかと思い始め、かれこれ20年。しかも新しいイメージは閉鎖された個人の中から発生するのではなく、様々な状況や周辺の人間との関係の中から発生するととらえつつ、それを表現しようと藤浩志企画制作室に勤務しはじめて12年。ずいぶん遠回りばかりをしている。

アートの超訳

- ・イメージを立ち上げ、表現する技術
- ・常識を超えた概念(超常識=新しい価値観)の苗
- ・人間の脳裏にイメージとともに感動というシワを作り出す装置
- ・人間の行動を作り出す社会的遺伝子(=文化)となりうる存在

注(誤解されやすい点!): 人の存在の意味と役割を模索し、超常識的な新しい価値観を立ち上げ、感動を模索する苗のような存在や技術、それがまちにとって大切なのであり、決して既存のアートという分野やアートっぽい作品が大切なのではないと思っているのだが・・・。

地域の超訳

- ・人間が育ち、生きるフィールド。「誇り」の象徴(檻で囲まれた「生きる」ところではない)
- ・自己探求を行い、自己実現の可能性を作り出す活動の場
- ・外部へのアクセス、対話と実践が可能で何らかの役割を担える環境
- ・常に何かが発生するプロセスの連鎖(可能性)を感じれる状況

注(誤解されやすい点!): 完成された場に「これから何かを行いたい」(=自己実現)エネルギーは集まらない。

特注: 地域社会におけるOSという概念

様々な活動(アプリケーション)が起動でき、住民はそれを楽しみ、開発できる基本システム(OS)という概念の大切さ。アプリケーションの開発を促し、その可能性を支援する役割。様々な活動が起動できる環境、インフラを整備し、つねに活動の発生へと導くデモンストレーションの重要性。行政=OS 公共から共有へ(共有施設, 共有事業, 共有財産, 共有空間 etc.)

これまでの藤浩志企画制作室のデモンストレーション例の紹介

- 「公庭は素晴らしい」(博多灯明) 地域における校庭という価値を強化するための祭りの創出
- 「サイクルリキシャー」人力、低速、専用道路を中心とした都市計画へ
- 「Vinyl Plastics Connection」「かえっこ」家庭からの廃品を利用したシステム型表現の模索
- 「新開地 楽座」地域での活動を導く共有空間のデモンストレーション

パネリスト プロフィール

下田展久 / しもだ のぶひさ (CAP HOUSE ディレクター)

1957年 神奈川県川崎市生れ。エレキベースを演奏。79年アルファレコードよりアルバム「ムーンダンサー」でデビュー。85年渋谷でダイエーの実験店「CSV 渋谷」設立に参加。88年、神戸で設備音響メーカーTOAの実験ホール XEBEC(ジーベック)設立に参加。2000年まで音と社会をテーマにコンサート、展覧会、ワークショップなどを企画制作。95年、震災をきっかけに生まれた日仏アーティストの運動「アクト・コウベ」に参加。神戸で「アクト・コウベ・ジャパン」を設立し、事務局を運営。96年より芸術と計画会議C.A.P.に参加。現在、旧神戸移住センターで進行中のCAP HOUSEプロジェクトにディレクターとして参加。

パネリストからのコメント

神戸に於ける先駆・実験的試みとしてのCAPとCAP HOUSE

C.A.P. (芸術と計画会議)は名前の通り、芸術家が集まり会議を持ったことで生まれたグループです。1994年に市の美術館構想に対して意見を求められた作家が知り合いの作家に声をかけ、反対するだけでなく自分たちで考えをまとめ、提案するために話し合いました。作品と社会の接点である美術館について考える、ということが芸術と社会の関係について話す場になり、そのアイデアを実施してみる機会になったのです。

98年、ある人から旧神戸移住センターの利用計画について意見を求められ、これがきっかけで翌秋から約半年間、この廃ビルをアトリエとして利用し、社会との関係を実験/実践するプロジェクト、CAP HOUSEを行う事になりました。

C.A.P.の活動は場所を設定する事でより顕在化し、多くの人に関わってきたこの古い建物は人と意味の新しいつながりを生んでくれました。こんなリソースが身近にあった事は驚きです。

このプロジェクトをはじめるときに決めておいた事、それは「事業計画を作らない」ということでした。場を持ち、人がつながって新しい意味が生まれることが最も重要な実験でしたから。しかし、この実験ができたのは、賛同し支援してくれた人と、事業規模が等身大のものだったことによるでしょう。地域を見渡したとき、こういった小さなものが多くあり、結果として多様な選択肢が広がっていることが豊かさの指標になると考えます。CAP HOUSEは02年から再開し、ビルの管理業務と支援者の寄付、助成金、そして事業運営によって現在も継続しています。

コーディネーター プロフィール

木ノ下智恵子 / きのした ちえこ ((株)プラネットワーク、神戸アートビレッジセンター美術担当)

1971年大阪生まれ。神戸芸術工科大学大学院修了後、神戸アートビレッジセンターに勤務。美術事業を担当。主な企画に若手芸術家の育成プログラム「神戸アートアニュアル」。アートマネジメントの実践「芸術環境整備事務所」。魅力的なまちづくりの実験「新開地アートストリート」(『湊川新開地ガイドブック』『新開地楽座』)などがある。その他の活動に京都造形大学、嵯峨芸術大学、夙川短期大学の非常勤講師などを務める。